嵐山誉之仇討

二十三
二十四

ヘ13
3322
12

嵐山巻〻続付巻之卅三

目録

一 桜木杉本武勇之事
　酔狂人と諍ふ事

一 神箱清五郎が墓所へやよひの文
　猿へ英雄とよくなる事

茶議學
大正十年八月廿九日 本大學出版部寄贈
門 へ 13 叢 3322 12

嵐山花鏡巻之廿之

極楽坊武勇之事

并 酔狂人を諫る事

扨も々々清水の前は新大納言の御妹秋

篠の里にしのびて清水の前は新大納言の

ゆかしきふかき物思ひにしづみてぞ……

禁庭の御所ちかくして在所々の武家
お旅所半分かくしへ御所の東の
かく白川まく吉田黒谷真如堂
白河ハ源氏しく岩倉小野や栗
栗山尾崎ハ維とす○くもしてこい
科の郷ハ江のあさかくこゝろあし
まくか尾張の瀬とくらゝまてかすく
之稲の吉田中しき秋かともみちのく

小野くハ鞍馬も折極ん清水の舞
台ハるくも尾も音羽くハ小栗栖の
池の水草まて人へもりハ日吉の
神そまても山王の末社新日吉もし
伏見稲荷深草へくるの男山八幡の
何のあかし人丸の社も木幡もれ
まてるつ名のもしがれり山入
宇治ハ川瀬の網代木まうり

水のうけやうはつゐじん仕様二理也淀川
と流れ行ハ八幡山崎にてひとつに合
鴨ハ京のうけに流れて宇治川そゝく
てる所也しかうして後ハ猶まゝにも理う
宇治や木津川は流れも深く夜に瀬も山にも
あらハ深くへてまてゝ清滝の大堰川木来
かうしてもしこの大井川戸無瀬川
梅津嵐山すこし也桂川の名も清滝川なり

亀の尾ハ山にとなりて又あたしの山の東の
ふもとに菖蒲流を出てこの流に来
あるいは所とうへてこゝに清滝戸無瀬大井梅
津桂川といふは大井にゆかしの山の
ある所ふかく亀の尾より梅津へ
菖蒲なりといふ隠川ならず天龍寺の前
より渡月橋といふ橋より天龍寺ハ亀の尾
の法輪のかくありあらしの山の麓に法輪寺

あり天龍寺ハ梅の宮之総門より右和
ごみのてらのうらなり亀山殿と
號り

まことたくひ嵐の山の林麓なる
松乃尾ハ有明の月
と定右衛門の友達藤原信盛の跡し
うれしきこゝろの重さハ源義の中なり
京よりも東南にあたる業平朝臣の塚ふ

大井川渡る船乃舞といへり
小くらの山も名ならぬ紅葉を
梅もさく大井川ハ千歳の舊地なりしかとも
昨日ハ昔の事となりても古ゑんあれ
新家なしさる舩と誘ひもとし紅織
うくと浮し酒宴ニ管弦浦ふ御の風流
哀とうちに金をおしもそうらし一艘の
舩にを崇つらなりて天目をつくしへし

妃女五人老人二三人がうちつれ酒をのみ
気をとりうしなひてうつゝなきさま二醜き
のおもてぞおほく女の身を聞ても
来るを男どもらしてかりてやけ人
酒狂のやからの婦に一献すゝめ
そのひと座にをるといふ女の身にあらう
作りもしまうるもはや婦人の恥のかゝり
あまたありといふ事老人の男酒狂のしくする

とぼひさうして綴ごとまで一句合点させて
おもしろく婦人あぢはひ衣しとしとて出まゐる
酒をのみてたくさんにみだりがはしく女をも
のぶしく親類つれての新婦の目
るをきせてくれが乃男と夫婦なくさめあそぶ中の
この婦人酒つけまゐり新婦こまてと酒
ゐて二三人水の中へあけまゐらす酒婦
夷うけ女ともあまつり花の姫来つてあそ

縁(えん)もゆかりもなきまでも四海(しかい)の内(うち)皆(みな)兄弟(けいてい)
なり何(なん)ぞ女のあやうきを見て捨(すて)置(おく)べきや
虎髭(ひげ)のおそましきかほし白眼(しろまなこ)つくまなこして
こう女人は船(ふね)よりうかぶこころざしかうじて女の
女癘(ひれい)がこころ神通(じんつう)と辛(から)き目(め)にあいそろふす
のわかしくなきそ心にもつて秘(ひ)なる命(いのち)をた
すけたりとその舟(ふね)へうつして舟の底(そこ)にかくれさせると
仮(かり)にゐなかふりの女をとなく引(ひき)摺(ずり)なうり女人の意(い)[illegible]

ろかきなきめふうしくおそまされることなくてと
晩(ばん)つかへ人し雲(くも)騰(のぼ)のごとくなる煙(けむり)をて
彩なる命は大蛇(だいじゃ)の蔵(くら)は葉(は)にも舟(ふね)ら言(こと)も
出(いだ)くしらのもなりくのきをもつて揃(そろ)切(きり)ける
で私(わたくし)が従(した)ふ事(こと)も文(もん)ほくまけ今海(うみ)に殺(ころ)すと
女癘(ひれい)の女をめでて辛(から)きめにあはせそろふに
だれや海(うみ)にいらくして女を行(ゆき)よう涙(なみだ)乱(みだ)れせんと
きりて千ずも我(われ)は女をともなひあのまでゝ女も恋(こひ)[illegible]

しまうつまてとゝしくなへ川まてと思しくと
おもしや兵衛のむかひうみとや誹ふ隙まれ
あそてらそゝや大井川くまけのまへれの波を
るのみいうみしとをみ女や乗しく善人と
しうらん年号の置しに甥けんしく酒具の迄
まていかんなく行年四月りて四海しく下
うう身しくしく中みて彩女御とうへて今日に
美しくさし行しゆてと向後へうく詩

あくり人へなりすとしくいくい大井川の出羽の人
なりしゆるりてせく人と舟と岸田まくし
はけし揺れ浪をまれずしく舟と寛を
ろきていその女川中とこうまりまう人前の又
撃しとあけん人うしみく黄なたしく
志つぐしく吟うもみ母ろうつ彩女御ゝ
後くしそ岸うとうりし清女御を
女めくもうしいつつやいでうへ一年しうくづつ

の[illegible]の[illegible]女[illegible]
[illegible]年のころ十七八のしる[illegible]
さて只今は[illegible]
[illegible]利家の[illegible]
[illegible]年の[illegible]
[illegible]の女[illegible]用
[illegible]の[illegible]
年のころ十一二のしるし[illegible]

[illegible]の[illegible]の
その人一[illegible]
[illegible]二人[illegible]
[illegible]人の[illegible]女[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]
[illegible]女[illegible]人[illegible]
の[illegible]

跡ハ今にのこりける是を見て古跡なりとて大
井川の岸辺にて船をとゞめふかくあはれみけるとかや
よろしや船しはしとめのり遊し嵐ほとに
此へてこゝら舞ひしるめしる新左衛門と
そろそろ二ツの舟にちかくよりの漁猟人あまた新
左衛門にいうと奈し大小衣服とはき草履を
ぬけ赤裸にふうりう大井川にて飛入り揺
殿さまへつきまいりて多人の舟に参り

よろしくもうしもひとつ御舟とりかへてくら
むかふひとりの船の中より声をかけみけるを
女とうもたひもの芝して扇やかしまつて
まんころ形くらいてことしかに新左衛門
おしらり行義ありのまてしもちゑもともさぬ
導せうまろくもにまものうへ酔の酒
て持ちいうと米くはえてそのとおもう
うつきあけて船をとりてよきまたあひ人を

こゝろ浮つ浮つ川中へ流さゆくこそ哀
中〳〵に天かけて気をそらしくひとつ事
何かとしのべて紫式部のえ和泉式部
のたくしきらんて云とすくゝ盛んにしるかな新
式部は唐にあかり酒くゝ歌とふさく交はると
忘しおふかんく煩なきくやしくて
そうかる家の人の業しゝのなくなりにけるかな
日ろ嘆けれおもしひとへいふ人は中〳〵とられて

旅の草枕と結ぶ酒なとしくくまかりし業しくく
清少納言は新式部の歌とほくしらんて紫式部の
かの事まて手にけり難しけりしとる孫の事若や
おもしろく文は歌と結ひしより物まくとまてゝやる
にはあかねさしてとそしては川と浮の旅の
ならはぬ人を知と三年ほとに住り大和に
川のあはれのはかなし歌とよしくへるまは滅
こゝろの空にはかなくやすくまかせらるゝのみ

こゝにや此人の乳母じゞうといふ女ありける
おりしもの咲中ぬ袖もなくしなしくつと
晴るおもてに手もすゝめ草のはくしつゆ
重ねくめる秋のとこの夢見ても只だ何し
らこ母の年ひさしくて只今まで有ものぞ
実なり我こそ此尊とき経をしつて
しとけなきくゝみの探ぬ。海の其ぞ
老あつしと日月をへて今き之新清水寺は

清水寺へ参りて座して参り人々とひの年
わすれつくしもうら母の日もすゞめ居て参ぐし
いかなる人もかれなりんと参りしあ母の事
三たびつかず菩提根のさる作法子ありて河内の
国の都へつけすゝめて大和年頃を
まあふんその心ころはおなじの咲おもて
やしのまゝすらくるらへて出いるの清水寺
我もたゞこそてよしみ人のめいつらへ年も清水

又人にまさる徳ありて和国の主としてたうとき
にいたりけり神代よりこのかた歌道をもつて
無為の国となりてこの人々めでたく和風にて
ちかしの君たちにいたるまでこの君は徳をあまねく
まさに御年より文学武芸あるゆへと
の天下の中大平西歌と和しおめし明らかと
又はのえてやまさることを詳しかくなと
古郷へゆくといふ神仏といへの事なるを

徳のありまた新所にてあつこうしやうと前じ
自ら数つかし先の今一二三月の事よ
幸を此のすすめの事なりいま歩むの道
自ら事あらしてに徳を所から歌いさきを
此くしりまつらすの歩む事くの事と
さかんとおもふかのをくふし武芸まて
ゆきてし終に年去りのすき庚申にもやさて
さりまして古国新をゆくのまひきし

されともこのしきにつゝ祇園とありけるとおもふ
みそかにかくれ清盛のおとを眼まつるよ
なる
神翁清盛か夢にみえしその夜
老人いかにも英雄とあらはるゝ年
新しく清盛かくいひしに人みなこと清盛
くくしていひ給ひて清盛か雄のこんを
天まて広中にまくりえて荒れける

二年平伏しくして荒川か荒翁綱して荒く
あらはれやう翁にくへてうなりけが者ん香
蔵壁しすふ四人大蔵卿乾入まそ台んへと
つまそうかし荒けまうら敬き来月らる御
一天の時此秋ことへてやくるま日のかす将口
古向にも対面して年はらくて天四川まく
まくしくへてもよくて祇をてまくあて座
うの方は荒射をく内し本をとうる年わくと

まことにおもしろくちきりて天書のままに吉時
まことのおやにこころ得してちかひし中
さまに二人は懐妊してめつらしく
清左衛門夫婦のよろこびまして天の告有年の
けんぞくさまに感応御そ目出たく悦び
唯しとそしまして様々の悦び祝ふ夜
も明つつ新婦と名付給ひ清左衛門夫婦
と命し新左衛門とて二人の孝行の忠孝と

母の年をおもひして孝行の中より
唐土山の孝養とてとりわけ孝ふかし
孝心と申く天の感応有て大きに孝行
のみちと告給ふ来月ことに天の告をうけて
親子とのよろこびにて吉日にまみえ
また戸田川の孫人もまた対面して
年を経てつけりそのよろこびめつらし
深きことは孝行の道とぞ申すとかや

のゝ国にさまよひしも大かたは屋中に山の奥を
みな人へ仏しんへ学びて五箇條の前をさてくても
学びをして学に必しかに大丈夫の事なり
角しらいさをひとくんで本の院の名僧
をしひさいとくつとゑ知りの気しとく
うつりて大風のつく往来報らくゆかり
見して其人は孫の柳をさりて世を風雨と清き
みちゆきて近く跡りて十五人の事なり

扇を抜きて西へ行し花風と山を見え
川ぞひ人の男どもも出て立て西へてとふ
事なく世のさまを見し給ひのも
あるものゝ名を知りて河原の金剛に入り
登りて拾ひしもの都の跡をたづね
利をとりしが都へ上り参るとてまかりしたく
二人の武士まゐりての道々ともしと語る
そのうちは立たる村のあたりを尋ねゆく

ゆきてまことさき人二三日のほとり渡邊の大井
川とて二万人の軍兵ども手勢を助けけると
酒を投入多人くとうけつゝ手勢と手勢とくみ
子多人のものは此方へ流を切れ
知らせてしてりしけの行て見まして
人の笑てはやしろ道中廉ゑ云て縁を
手くと投出し武士はりしく云ひて
武烈深若い猪の原まして渡えて二千人鎧

を捕りの若者切りちりてを起ちまして人の
武士出し多りとふうひ渡りてくらしく
切捨りしまして来て乃がまして大兜を着
を一時に鉄くら武士ありけまして本意とし
ゆく大将と生捕し武士はりしと多く
見まして事に懸りまして二万人の浪人とくらし
こく其人の武士面をもちて中々に割り
入り残る者を捕りけまけりとく終まの

おりまじはりの旅人の中に紅毛あまたありて
うちつどひ清水所通詞人にはかりて
手の内をまねかしく椛しりうく
めでたき事なり

嵐山蒸焼村巻之廿三終

嵐山蒸焼村巻之廿四

目録

一　猿丸桜乃尾と中より根着の事
　　并に御鉄の事

一　猿丸紙写とんとみるの摘の事

嵐山蓉説附巻之廿四

蹴鞠梅の尾ゆく猿猴の事

縁奇の事

蹴も蹴鞠を蹴下ゆく遊びしとゆへて
掠めふれしうる金銀ゆくさ接とえく
のひ黒絹の切織もしくは紀家なるの
綺とよりし朱鞘の大小つまんでしてさ出てて

都の〜童子と云ふ童子さん峰の梅の尾と
のおもしろさをとみてはまゝしらぬふ
毛短とさせ給へし山業とおゝす深け
くゝりしかもりたちの日を振りく日を
西山にさかしても夕日の照りつゝる
くしつく手引ふる金剛杖をつきたる
ところへ二人の武士猪丸の掌をおさえ経
をいんしよろしく砂煙りよ幽に谿く

ろふふ敵の猪丸もつゝしく居待すう
きしへ出帯刀が間まくぬりしへくも
おゝぬ都のゆきうへとて猪丸から
はまり砕りと森し其の敵つゞ間すめの
けをんしとるうくし者へと長杖一丈
なりうけ炎を猪の二人へかゝる稲妻の力
をのりて切てうる猪丸おしもおさえ
あんへの力をとうらおしゆかしくしまの席よ

うつ聲をあけゝる
陀をしくもあけつる我と梅の色や
めつらしき暮に隆房ら
を經つゝくされし春のはてしり
老かしく殿上人の參集り年々
おかしくてはりけるか事にいてある人のこれ
あり一寸院席へ出仕しけれ慇懃に
申まて小歌の詠じて中座して去つま

ちかゝの幕に早しきつまる
みつからも座しけれは今日はいかに
わかまし雲の上人かけんと經ちし
みえと語る手にかして松へいりそのとき波
郷の宮の中納言は花盛中将の嗟
今宵はいかにするとて申すかへしつけそしてそれ
より其方が家にしもしし座すせられし御
いかゝせらるゝ有かともたれて聞かく

まさ里人へことみちのくとしるしあかし事
気もかくて感せし若浪人ならで抱へ
よさん翁はけりてさいうかや後見にて
てりてある日に呼寄の庵に見たるもわろく即て
有りしこと申付ともかくはかりて京の大学
そうらふ浪人なしても是を抱への弟子仕まつる有
かうさ給金の高もまさりしば是より浪人
まゐらせしかいましてさいの浪人横関源義

よく子細ありて浪人仕りしかばまゐりてよ
つきゐる御ゆるしもかふむりて源義経とりつき
御ゆるしもかふむりて商人の家業も絶えり
あくまうしは申すなり
源義祇園とゆかりて親の家
それより横関源義は在京中わざくの
ひやう家業をつかはしつゝ中わざの源義経と
やがてあんずれ武勇もありて和歌を

うしろ平八ハ経をよミきと打てうつゝものゝ人
精勤せしものとて経文をつとしんで
平伏して有けるをとうへしまかた
のかしこ経をよミ侍る庵にあり仰しの
ところ法人ハきく者、何とぞしとめられ
ところ中ハ偏吟ハ其怪之人祇堂との酒標
高因尻二人と切ころしてあるをきりのい
切くをつけものハ細水流に家奈川寺内あり

おもひおもひ汁ひやしもちうなりしひ
ありしきにたりつる中ねしのかしこに経文を
向ひあみへおもむきうしろの四町前後と生捕
ノ手よあるしが切く捨てしのをかすめし
うあつたりて見るして経文ハ何御前と
たりうれもさる成しく祇園とが酒標よ
うけは平二階とう入てもあけかりまで
箱持ちとりして銚子して酒ととりて飲ちう

綱はのそへいでゝ屋根をつたふてとびけ
猿猴のごとくにとびうつりてまいりて
居たりけるがあのき酒呑の人にも
こゝのつにて人を貌しつゝも尋常の鬼
きまりて喚ける夷はいきらつぎし
新参のあのきと傍らにや一筆めしてまいり
悪きをしてまいりし綱太刀をぬき
そのまゝ引きその首(くび)をだし見物せよと生捕

らんとしけるを綱そうち夷がうで首をとらんとせしを
ぬいて切てかゝる綱をものともせず用心し
刀をぬいて手向ひ双方打合ひしばらく
戦ひしが、いかゞしてか綱は夷を
みて刀をもつてうしろより夷をつかまへ
刀をぬき綱をつかまへ綱ちからをいだして
くんづほぐれつ夷を生捕りにして
しめ縄にて縛りとり縄にて[illegible]
[illegible]

こゝろにハ四一蘭酒としてよそへはならへたるの
そく庭にも人傳の其号○ゑんゆうてそふり
またなら節分は折らなるすゝろふてふりく
蘭奢とかしく今日のならしと拾ひし
うゐひその人へしく縁じ納めつしとも
志縁くを手にて出入るくしんや麿ゝる
つそれし言に蘭奢拾じあるくゝゝる
かしは紅縁るのさせゝん先中香のあつめと

は蘭は伸べんとは清ることて花ゝくくし
て明の木れの庭に瓔珞し懸ゝりまき
たらんともぬ風情の中秋の蘭花
りけれ奇妙くしてあたらしけるくさまの
こくしく是りすいの香すくと
は縁をたづへんとまと明まていの庭る
瞿麦萱草百合の花ゝき合りそき
しろけりの桔のしきまくも萩菊桔梗

刈萱女郎花などもしをれはてゝ香
わづかに風情もなくみえのこりたる菊
の色も日を追ひて見所なくなりゆき
に一面にふりつもりたる松の葉ごし
またしも池の汀に山茶花枇杷の花
紅梅なども香うつろひて漸く霜にうづもれ
顔も中々の奇き眺めと成りて入日する
遠き丈け円の四季のうちめと日頃の

ある日と出でゝよしと行く所のこと
にまかせて渡りて見るに遊びける
よし新草の葉の露の中の露のよし
はや見ゆる花の名の所のすがた
こびあいての風なじみして容易
くやしく菊も漸くしぼりしひのよめ
そよ吹きて梅の尾のすゑに残りの
折から名残の寒く権現にたくふ

そのとき、ひとへにこゝろざしのありさままことに
加賀(かゞ)の国(くに)つはものゝまへにてあらそひ、そのうへ
たぐひなくさこそうけたまはりけれ。ならびに候(さふらふ)
身にをい(?)て御(み)かたに候(さふらふ)て、いかでかおろかに候(さふらふ)べき
とかく申(まうし)て、御(ご)さた(?)ありけり。将軍(しやうぐん)もさこそ
いかに武士(ぶし)のやうにいかでかとこれをきこしめし
かやうにのたまはせけるは、源(げん)氏(じ)ときこえさせ
たまひしことのふかさ、平家(へいけ)のぐんぜいよりも

の源(げん)氏、まりしたまひしこと、の御ゆへなりしかども
ある将軍(しやうぐん)のこの六波羅(はら)中将(ちうじやう)のかはり
いかぬと平家(へいけ)のかくれしこと後(のち)武家(ぶけ)力量(りきりやう)
ありけるをたゞしも平家(へいけ)のうけたまはる事をも
源氏(げんじ)しも平家(へいけ)の母(はゝ)しほれうたがひなく
武蔵(むさし)の国(くに)の源(げん)氏二代(だい)の武家(ぶけ)冷泉(れいぜい)家(け)
らいりきてとおほくまゐりやおほくそうらんども
まことにいかゞしてこのごろの源(げん)氏(じ)もろともに

なりし〳〵ちゆうがうの古伴と伝へしうへ大天
梅の尾とめしくまれしく
鶴ましくもわけ入ゐるこれと梅の尾や
そよすふくまて清家にあらし
将軍家しるしの首かゝりしけるが白の
うつり来えかゞしくしまくこのまゝ梅ぞ
尾のとみすらの絵をましゝしさうしん
せう家へしたんげりうとすゞのしとや

いつくしの寺にてありし経文を写し
おさむる書のかそへし清書して奉る作
ようて清くかくさ奇と云ふ鬼神をまつりし
かの秘文のみ真言とうたふりしか所への
面がりくおそれまつりしけるを将軍家に
いふんげそのしるしを得て奇と紙ぶが
菩提をおもひまつりしかは遠ていの
ぞかくととみへんとかし〳〵けるこの寺にて

なりけるのいろをまして紛々と由々たりけ
ことにむすめくさはしろくしひの師のめく
荘子もまた不思議のことをおもひし夫
〜門くいぼ李のふりかへとかへせ屋なり
ところなぬきてしなむと思せこと〜ていまだ之
なりけり枕みないふなりし大椿公
又親なき〜たちの身ありたるの〜のまへ〜
将軍ここ人〜〜そ〜〜てなりし給ふくいん

退て一統くくるへしし〜往猶なりく
〜池をの〜終と浮し海鉄あつてむく荒
の聲 綾絵をとめしく〜の〜ふい〜今日
〜夜中秋るる人おもしるるつま新〜の
〜まくくし桂澗縁美をるとつまの〜閑
よけるまで続きるのまの口笛武〜のくとの
ようし文柄の尾乃斉なりし文不思議の
御とめこすぐて〜〜の〜〜しか〜しく

渠ほこしくその口閧にかゝりて取らんとつゝらう
ところへ黒めをまとひ訴しおもしくるのみ
両体あらく将監しく実相しかも荒膚にそ
けしきた悲業をと抱へくさうしてものゝ練葉
まつりかおそ色ある狼狽して直しあらそふ
しものあり浪人にてまたしん合せうかわらん
とのこゝろに流石に天下の形勢を伺ふて
所領のかたし浪々の人と成てやかて至

久しくとはいのちをもたくわへ所望人に大かたゆくも
ころ往きかし人浪々の身はたゞ恨悲しむの思ひの
あらんもしこゝろつまらぬ浪人の身にて
もちひる事なくいまに宇生の山にてありけるかなしさ
いかにも我か身は浪人のかなしきにて候ぞあれ
知らざるにしんとして浪人にこそありけれ
浪人などにて知るべしとかくのいふに
苦しくしてもあつかひとしてかやうにて

人はきゝてもこゝろをかしく殊に浅間の
命ハ富士権現とも富士の山の
中にまるきおほいなる池ありて聞たるまなこ
ゆくとゆへ浅間ハしひけなさるゝ
のんでそのまゝそだち邦にしよんと富士
の山ハ一夜にして出現したりといふ
またとしも縄しげしも都良香の富士の
誠ハ上へくて捗るゝ　孝霊天皇

河口のけしきいと雲霄にそびえ出たると
さらにいはん二尺の千とせふるし近江の湖水
いふまでもなくむかし近江の国志賀郡の
地裂けて一夜に湖水となりしといひ傳へ
これもまたしるしなき白鬚の事はいふべく
甲斐の馬ハつたなき事をとゞまる者たる
まことのことを知りていふにはあらずや
あるべきことを周公旦の孫蕭何草卓にて

利ありとみえしハ馬より落て草中にかくれ
部を従軍に出ずるものにいたるまで知れん
我々いかのなる塚中より軍人とよりて
草中にかくれし軍人ことごとく助けられけり
草中より敵に向ふして火にはなつて戦ひける
従人是こそ敵の首をとりてかへりて首を
指揮攫取ものにして雨中の浪人とする
とあるは清左衛門新左衛門に續きあたへく

ワしふかきみだれに善人ともいふさま清左衛門ハ
勇猛のこと新左衛門も血気の若者のうちにて
それより一人々何事もなくおもひしかば
いつのまにかの旅人様々におもひて新
左衛門ともあひかれてもおなじく心ゆかしの
先をとりし叶ひて二三人一時にかかりつゝ
ともに坂より生する大木のごとくかかり
すこしも旅人ハ様々いとあらく

たゞ新なる衣とふかくうてなずかりこゝろま
年のころ二十ばかりの男やさしく気もちうつくしく
何の人よたけつれて見ければ女の門にたゝずみし
こゝろよし絵に画ける御影の紫
紙鳶ともいひ目の出来るよりかく
の緋縮のことゝしこそしりとしとかや
あるハ十六七斗の女その美しさいはんかたなきを
匂ひある生たる色の昔絵に紅粉黛月とも

あさましく覚ぬとつゝしふ風情和歌りしなき
つたへたるハ小野小町赤染衛門和泉式部
にしくハ紫式部、唐にても殷紂の妲妃
周幽の褒姒、夏桀の末妃、晋献の驪姫、呉王
の西施、漢の武帝の李夫人あしくハこれらハいづれも
ましくいへどもなをよく腰ハ柳のごとく
なよやかにまなじりあけて口ちいさく唇
うるはしく髪の毛いと黒くして天然の

こくたいのかくるゝかへり纏縛病の中を
じとひろくしもけくわしのところ
康楽まてつゝていふ如き前や平等なる
ゆかしゝゆへしてわかしつゝから
に涌しけれ多くひ[illegible]もなかへら
彩衣には清き衣よしひ日本の大菩薩は
諸らしんや清き衣こそてわれ積の深重
濁滅する宮の浄[illegible]なるのやつくる

[illegible]
魔雲の山のはれてほどもなく
慈悲の梵火の煙りなかれさり
しき五障する大魔の毎々出けれとゆきて
これ日和の大菩薩だしてまして婦人をは
大丈夫の[illegible]縁なりと成じてかなう
とうくらら面をも止て晴天となり
それだになくてきてしい白たひて

い出りしかば

嵐山参銚子持参して女四人